

教 育 研 究 業 績 書		
平成 29 年 11 月 15 日		
氏 名 山 川 伊 津 子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キー ワード	
社会福祉学、ヒトと動物の関係学、動物看護学	身体障害者補助犬、獣医療ソーシャルワーク、動物看護、動物看護師、動物介在介入	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
<p>1 教育方法の実践例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 書籍（児童書、一般書）を用いたの授業展開 ・ レポート提出による学生へのフィードバック ・ 施設見学による体験学習と情報収集 	<p>平成 10 年 4 月～平成 23 年 3 月</p> <p>平成 10 年 4 月～現在に至る</p> <p>平成 10 年 4 月～平成 23 年 3 月</p>	<p>ヤマザキ動物専門学校動物管理学科の「動物文化概論」はヒトと動物のつながりを一つの文化とみなし、人と動物がともに生きる社会について学ぶものである。そのつながりを「アニマルセラピー」と「アシスタンスドッグ（身体障害者補助犬）」という視点から捉え、社会福祉的な意味をふまえてヒトと動物との関係を考えるという目的をもつ。その理解の一助として授業の中で関連書籍の内容紹介、あるいは OHP を用いて児童書の読み聞かせなども行う。特に盲導犬、聴導犬、介助犬に関する児童書・絵本は平易な言葉と絵との相乗効果により、作者のメッセージがダイレクトに伝わるため、学生の理解促進に大きく寄与するというメリットを持つ。</p> <p>ヤマザキ動物専門学校動物管理学科の「ペットロス論」の各授業の後に授業内容の簡単なまとめと感想と同時に、授業内で紹介および読んだ本の感想を書いてもらう。講義内容をそのつどまとめることにより学生の理解が定着していくと言うメリットがみられる。また、毎回学生の興味の対象、理解度を確認できるという教員側の利点もあり、次回の授業に反映させることが可能である。尚、回収したレポートは適宜コメントを記入した上次回授業時に返却するため、学生に対して確実にフィードバックが可能となる。</p> <p>ヤマザキ動物専門学校動物管理学科の「動物文化概論」の授業において、身体障害者補助犬である盲導犬、聴導犬、介助犬の各施設の紹介し、一般見学会等の情報を提供する。（盲導犬；社会福祉法人日本盲導犬協会・社会福祉法人アイメイト協会、聴導犬；特定非営利活動法人聴導犬育成の会、介助犬；社会福祉法人に本介助犬協会）都内あるいは近隣であれば引率することもある。座学の講義で得た知識を実際に見学し、体験することにより知識を深め、さらに幅広いものとすることができるというメリットを持つ。</p>

<p>・管理棟（グリーン・グラス・ロッジ）を使用しての授業</p>	<p>平成 24 年 10 月 ～現在に至る</p>	<p>「アニマルアシステッドセラピー演習」の授業においては、Animal Assisted Activity（動物介在活動）の模擬的なふれ合い活動をグリーン・グラスロッジにて実施している。介在動物として、犬、ウサギ、モルモットを使用し、高齢者施設訪問を想定して、車いすや歩行器を用意する。学生はボランティア・ハンドラーと活動対象者の両者を体験し、実際に高齢者施設で実習をする際に、どのように高齢者と関わっていけばいいのか、コミュニケーションの大切さを含めて学んでいく。また、対象者に対して、どのように動物を介在させていくか、動物へのストレスを最小限に抑えられるように動物福祉観点からも考えを深めていく。</p>
<p>・カウンセリウムを利用した学生の「居場所」作り</p>	<p>平成 24 年 12 月 ～平成 27 年 3 月</p>	<p>学生支援の一環として、カウンセリウムを利用して「ホットランチタイム」という取り組みを臨床心理士の資格を持つ教員 2 名と共に開始した。これはクラスの中で孤立したような学生が落ち着いてお昼ご飯を食べたり、教員に気軽に話しかけられる場を提供するものである。また、カウンセリウムを身近なものに感じてもらうという狙いももつ。3 人の教員が週に 3 日交代で昼休みにカウンセリウムに駐在し、利用者を受け入れる。ハロウィーンやクリスマス等季節感のある飾りをし、雑誌、飲み物を用意して、学生が利用しやすい雰囲気作りを心掛けている。人数は多くはないが、何人かの学生にとっては、昼休みに訪ねる息抜きの場となっており、今後これをさらに発展させ、学年の異なる学生の交流の場となることも視野にいれて取り組みを継続させていく計画である。</p>
<p>・「介護付き有料老人ホームカーロガーデン大塚」における卒業研究調査の実施</p>	<p>平成 25 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>ヤマザキ学園大学の地域貢献の一環として、アニマルアシステッドセラピー演習・実習担当教員 3 名（川添講師、堀井助教、山川）で始めた「有料介護施設カーロガーデン大塚」（八王子市大塚 230-5）におけるイヌとのふれあい活動では、高齢者と動物との関わりについて卒業研究をする学生のフィールドとして、調査を実施している。自分のコンパニオンドッグを連れて参加するボランティアや活動に参加する施設職員に対して、現在アンケート及び聞き取り調査を行い、施設でイヌを介入させてふれ合い活動が、入所する高齢者に対してどのような効果をもたらすかを調査している。学生本人が活動にも参加する施設での調査は、ボランティアや施設職員との良好な関係の構築の下、有意義に実施されている。</p>
<p>・八王子視覚障害者福祉協会の会員を対象にした卒業研究の実施</p>	<p>平成 25 年 8 月～ 平成 25 年 9 月</p>	<p>身体障害者補助犬についての卒業研究として、盲導犬使用を希望しない理由について、視覚障害者についてアンケート調査を実施することとした。八王子視覚障害者福祉協会へ調査協力を依頼した。八王子視覚障害者福祉協会へ調査協力を依頼し、会員に対して、質問内容を点字に直したうえで郵送法により、調査を実施した。質問内容とし</p>

<ul style="list-style-type: none"> 多摩動物公園における卒業研究の実施 	<p>平成 25 年 9 月～ 平成 25 年 10 月</p>	<p>ては、外出時の方法、盲導犬に対する考え、盲導犬希望の有無とその理由等について尋ねた。点字で返送されたものについては、会員に点字を読み上げてもらい、録音したものをテープ起こしをしてまとめていった。学生が視覚障害者と直に接触し、盲導犬に対する率直な意見を受け取ったことは、有意義な経験となり、貴重な意見をもとに卒業研究を進めている。</p> <p>多摩動物公園（東京都日野市）で、子どもと動物との関わりについて卒業研究を行う学生の調査を実施した。動物園内にあるモルモットふれあい広場に参加する子どもの保護者を対象に、子どもが動物と関わることについてどのように考えるか聞き取りを行った。一日 15 回前後行わるふれ合い活動は 1 回に 15～20 組の親子が参加するが、1 回につき 1 組の親子に調査協力を依頼し、子どもが動物と関わること、ふれ合い活動での子供の学び、学校飼育についての保護者の考え方等について意見を集めた。都立動物園という公共の場での聞き取り調査は、計 6 日間におよび、多くの貴重な意見を集めることができた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> アシスタンスドッグ演習授業における身体障害者補助犬使用者の講演 	<p>平成 25 年 10 月 ～現在に至る</p>	<p>4 年次後期に開港されるこの授業では身体障害者補助犬である盲導犬、介助犬、聴導犬の三種それぞれの使用者を招聘し、直に話を聞く機会を設けている。学生にとっては、視覚障害、身体障害、聴覚障害について、さらに補助犬の働きについて理解を深める機会となる。また授業内で補助犬の簡単なデモも実施してもらおう。さらに補助犬を支えるボランティアにも授業を提供してもらい、補助犬の一生が様々なボランティアによって支えられていることを理解する。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 障害者福祉論の授業における施設見学 	<p>平成 26 年 12 月 ～平成 28 年 12 月</p>	<p>平成 26 年度から 28 年度の 3 年間の障害者福祉論の授業内において、毎年 2 か所の施設見学を実施した。一つは島田療育センター（多摩市）でもう一つは東京都立南大沢学園（八王子市）である。島田療育センター日本で初めての重度心身障害者のための入所施設である。1 時間の講義では施設の成り立ちから概要をスライドで説明を受け、その後センター内を説明を受けながら見学した。寝たきりの障害者も多いこの施設は、普段学生が触れることのできない世界で生活する方たちであり、貴重な体験となった。南大沢学園は、軽度の知的障害を有する高校生が職業教育を受けながら学ぶ学校であるが、ここでも最初の 30 分で学校説明を受け、その後構内見学をさせてもらった。生徒さんたちが非常に明るく、懸命に学ぶ姿に、学生は大きな感銘を受けたことが、のちに提出されたレポートで理解できた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 社会福祉論・障害者福祉論の授業における招聘講師による講演 	<p>平成 27 年 5 月～ 現在に至る</p>	<p>社会福祉と障害者福祉論（障がい者福祉と心理ケア）では、福祉の現場で活躍する専門職や障害当事者を招聘して講義を提供してもらっている。総合病院勤務のメディカルソーシャルワーカー、</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・障害者福祉論の授業における福祉用具使用の体験授業 	<p>平成 27 年 10 月 ～現在に至る</p>	<p>高齢者施設の施設長、病院リハビリ部門の理学療法士、盲導犬使用者などである、普通の座学では得られない、現場の生の声を直接聞き、それぞれのようなことが日々起こっているのかという理解につなげていくことは、学生にとっても魅力のある講義となっている。</p> <p>身体に障害がある方たちは、自助具や補装具等を用いながら日々の生活を営んでいる。それらを実際に体験することで、身体障害者が有する生活の困難を理解することを目的とする。いくつかの体験を順番にするが、大きなものとしては、アイマスクをしてペアの学生の手引きをしてもらいながらの歩行、車いす歩行、白杖使用、左手（利き手と反対の手）を用いての箸の使用や記名などである。ささやかな体験ではあるが障害理解、障害者理解につながるものと感じている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブックリストおよび資料としてのプリント ・ペットロス論のワークブック的プリント ・アシスタンスドッグ演習テキスト 	<p>平成 10 年 4 月～ 平成 23 年 3 月</p> <p>平成 18 年 10 月 ～現在に至る</p> <p>平成 21 年 2 月</p>	<p>ヤマザキ動物専門学校動物管理学科の「動物文化概論」の授業では、毎回関連テーマについての書籍を紹介するが、それらを一覧にしてブックリストとして配布している。ブックリストはテーマ別に、「ヒトと自然」、「アシスタンスドッグ」、「アニマルセラピー」、「動物保護・愛護」という内容で分類し、絵本、ヤング・アダルト、専門書まで幅広いものをリストアップしている。昨今の学生は活字離れが著しく、ほとんど本を読まないという学生が少なくない中、大きな興味をもつ動物関連の本を身近な形で紹介することにより、読書に興味、親しみを持ってもらい、読書の楽しさを体験してもらうことにつながる。</p> <p>ヤマザキ動物専門学校動物管理看護学科、およびヤマザキ動物看護専門学校動物管理学科の「ペットロス論」において、グリーンワーク（悲嘆作業）の一環として使用できる子供向けワークブック的プリントを配布する。ペットロスは子供にとっても大きな問題であるが、一般の大人の飼い主に比べてその対策はまだ進んでいないのが現状である。将来動物の専門家となる学園の学生には、さまざまな支援の形を学ぶ必要がある。また、学生自身が子供のころのペットロスから立ち直れていない場合もある。人の悲嘆の援助をする人間として、自身の悲嘆を乗り越えるためにも有効な教材と考える。</p> <p>身体障害者補助犬である盲導犬、介助犬、聴導犬それぞれについての歴史、育成方法、仕事内容について、平成 12 年に施行された身体障害者補助犬法について、補助犬使用者の現状について（インタビュー内容に基づく）記載した。補助犬は身体障害者の自立と社会参加を促進するための「生きる自助具」という観点から、障害者福祉についても説明し、さらに自助具といえども生きて</p>

<ul style="list-style-type: none"> 動物看護学教育標準カリキュラム準拠教科書 人と動物の関係学 第5章ペットの飼育 知りたい！やってみたい！アニマルセラピー 第5章ペットロス、第7章アニマルセラピーの歴史と概論 動物看護学教育標準カリキュラム準拠教科書 動物公衆衛生学 第1章-2動物との共生 	<p>平成26年8月</p> <p>平成27年10月</p> <p>平成27年12月</p>	<p>いる動物であるため、動物福祉についても説明を加えた。最後に動物看護学部の学生として、動物看護師が補助犬に何ができるかの説明を加えた。日頃あまり接する機会のない補助犬と補助犬使用者に対しての理解を深めるために、さまざまな角度から説明を加えた。</p> <p>全国動物保健看護系大学協会により策定された動物看護学教育標準カリキュラムに準拠した教科書の1冊であり、担当章では1. 人はなぜペットを飼うのか一人が動物をペットとして飼育する理由、2. ペット飼育の歴史と現状、3. ペットの飼育一人と動物がともに幸せに暮らすために必要なこと、4. ペットへの愛着と依存、5. ペットロスの定義と対策について執筆した。</p> <p>本学アニマルアシステッドセラピー論並びにアニマルアイシステッドセラピー演習・実習授業内で教科書として使用している。担当章のペットロスでは、その定義、悲嘆反応、準備と対処等についてトピックを入れながら記述した。またアニマルセラピーの歴史と概論では、ヒトと動物の関係、医療の側面からの動物との歴史、愛着、アニマルセラピーの効果何度について説明を行った。</p> <p>全国動物保健看護系大学協会により策定された動物看護学教育標準カリキュラムに準拠した教科書の1冊であり、担当章では、ヒトと動物の関係、動物愛護、動物介在介入と動物福祉について執筆した。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生による授業評価 学生による授業評価 	<p>平成19年10月</p> <p>平成26年10月～現在に至る</p>	<p>ヤマザキ動物専門学校動物看護美容学科において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると、「授業に対する全体の満足度」の項目について、学生の90%から「満足」という評価を得ている。</p> <p>ヤマザキ学園大学の「社会福祉論」、「障害者福祉論」の授業に対する学生の授業評価（アンケート）では、社会福祉への関心が高まったという意見が多く、「授業に対する全体の満足度」の項目について、学生の90%から「満足」という評価を得ている。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p>	<p>昭和62年5月～平成20年3月</p>	<p>受付を中心とする歯科医院での業務はクライアントとの信頼関係が非常に重要となる。歯科医との橋渡しをすることもあれば、他の機関への連携を担うこともある。また、ラポールが形成されると、治療以外の個人的な語りを受け止めることもある。このような働きは歯科医院内でのメディカルソーシャルワーカーとしての働きといえることができる。</p>

<p>5 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ヤマザキ動物専門学校動物管理学科における教育実績 ヤマザキ学園「小中学生どうぶつふれあい教室」 三鷹市立北野小学校 3年生総合学習 ヤマザキ動物看護短期大学における教育実績 	<p>平成 10 年 4 月～平成 23 年 3 月</p> <p>平成 12 年 7 月、8 月各 1 回</p> <p>平成 14 年 10 月</p> <p>平成 18 年 4 月～平成 24 年 3 月</p>	<p>「動物文化概論」の授業において、「アニマルセラピー」、「アシスタンスドッグ」、「動物保護・愛護」等のテーマでヒトと動物との関係について講義を行う。アニマルセラピーでは、Animal Assisted Activity（動物介在活動）、Animal Assisted Therapy（動物介在療法）、Animal Assisted Education（動物介在教育）の共通点と違いについて述べる。アシスタンスドッグでは、身体障害者補助犬として規定された盲導犬、介助犬、聴導犬の歴史・育成・現状と補助犬法についてふれる。動物保護・愛護では、ヒトの都合で処分される動物たちについて語り、動物と共に生きるとはどのようなことかを考える。</p> <p>ヤマザキ学園主催の「どうぶつふれあい教室」において、小中学生およびその保護者対象に、動物を飼い、共に暮らす素晴らしさ、重要性、そして責任について、講演を行った。青少年犯罪と動物虐待との関連性が問題になる中、幼い時から動物と共に生活し、命を育み、その責任感を身に付けるということは、命の尊さ、すなわち生命倫理を学ぶことに等しい。また人間関係のトラブルにより、いじめ、不登校等が問題になり、「心の教育」が義務教育の現場で重要視される時代において、情操教育の観点からも、動物とふれあう意味は大きい。</p> <p>「盲導犬」の育成とその働き、および盲導犬とユーザーの受け入れ方法について、3年生対象に授業を行った。平成 14 年 10 月から「身体障害者補助犬法」が施行されるに伴い、補助犬の中でも最も歴史が古く、実働数も多い盲導犬に関する勉強会である。視覚障害者のための盲導犬、聴覚障害者のための聴導犬、そして肢体不自由者のための介助犬の 3 つを指して補助犬と呼ぶが、補助犬法はこれら補助犬使用者である身体障害者の社会参加と自立を促す法律である。補助犬とその使用者を理解し、受け入れていくことは、障害者理解、さらにはノーマライゼーションへとつながっていくこととなる。</p> <p>「ペットロス論」の授業において、ペットロス全般についての講義を行う。まず、ペットロスとは、何を指すのかを言葉の定義からはいり、どのような状況を意味するのかを学ぶ。次に、ペットロスに陥ったときに現われる「悲嘆反応」について 4 つに分類して心と身体に現われる変化を説明していく。また、ペットロスの背景要因をいくつか挙げ、現代社会とペットとの関係を考えていく。ペットロスは通常病気ではないが、ストレスが大きくなる可能性があるため、思いペットロスにならないための、予防策をのべる。最後に実際に別れが来たときにどうすればいいのか、という対処法を学ぶ。また、「子供とペットロス」、「安</p>
--	---	---

<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県立七里ガ浜高校夏季体験学習事前講座 	<p>平成 20 年 7 月</p>	<p>楽死」についてもふれていく。全体的に、動物看護師としてペットロスに陥った飼い主に対するサポートとして、何ができるかを学生一人ひとりに考えてもらうことを目的とする。</p> <p>社会福祉に関する体験学習の事前学習として、「アニマルセラピー」「身体障害者補助犬」という観点から動物が介在する福祉について、ならびに「ヒトと動物の絆」について高校 1 年～3 年生対象に講演を行った。アニマルセラピー、補助犬共に基本となるのは、Human Animal Bond（ヒトと動物の絆）であるが、その形成には、ヒトと暮らす動物（補助犬の場合は犬）の持つ生理的特長、暖かく柔らかい、とその性格が大きく関与している。社会的地位や外見で相手を判断する傾向を持つヒトと違い、動物はありのままの相手を受け止めてくれる。これは究極の「心のバリアフリー」であり、まさしく動物の持つ力である。今後社会では、このような動物の「力」がますます必要とされ、動物を介在させた福祉が広がっていくと考えられる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・八王子市民講座 「動物と癒し～犬と楽しむ健康生活」 	<p>平成 22 年 9 月</p>	<p>八王子市企画の市民向け講座として「動物と癒し～犬と楽しむ健康生活」というタイトルで、2 回にわたり講演を実施した。第 1 回目は、ヒトと動物との関係、アニマルセラピーといわれるものが大きく 3 つに分類されるということとそれぞれの活動（プログラム）について、身体障害者補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）といわれるイヌたちの働きについて説明を行った。2 回目はペットロスについて、定義、その内容、背景、さらには準備と対処について話しをし、動物と共にくらすということ、そして愛する動物との別れについて語った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・動物看護師統一試験の作問 	<p>平成 24 年 10 月～現在に至る</p>	<p>動物看護師統一認定機構の依頼により、平成 25 年 2 月に実施された動物看護師統一試験の「ヒトと動物の関わり」に関連する問題を作問した。以後毎年同じ項目の作問に係っている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・長野県立須坂高等学校への出張授業 「ヒトと動物の関係—動物介在福祉—」 	<p>平成 24 年 10 月</p>	<p>伴侶動物といわれるようになったペットがヒトに与える効果、その効果を社会のなかで活かしていくアニマルセラピー、その 3 つの種類と内容、さらにはヒトを心身共に支える身体障害者補助犬といわれる盲導犬、介助犬、聴導犬について説明し、ヒトと動物の関係と動物が介在するヒトの福祉について講義を実施した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・秋草学園高等学校（埼玉県へ）の出張授業 「ヒトと動物との関係—動物介在福祉—」 	<p>平成 25 年 10 月</p>	<p>同上</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県立秦野曾屋高等学校への出張授業 「アニマルセラピー—動物を介在したヒトの福祉—」 	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>上記内容の講義に加え、イヌを用いて、動物介在活動のデモンストレーションを実施し、実際にどのような形でふれあい活動を行うのかを説明した。</p>

<ul style="list-style-type: none"> 多摩大学附属聖ヶ丘中学校への出張授業 「ヒトと動物の関係」 	<p>平成 28 年 6 月</p>	<p>聖ヶ丘中学校では、生徒各自がテーマを決めてそれについての卒業研究が行われている。そのテーマの一つとして、動物、ヒトと動物との関係について講義を実施した。伴侶動物となった動物たちが与えてくれる効果、その効果を用いて実施されるアニマルセラピー、ペットロスといわれる愛する動物との別れ、さらに身体障害者補助犬についての講義を実施した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 神奈川県立秦野曾屋高等学校への出張授業 「ヒトを支える犬たち—身体障害者補助犬—」 	<p>平成 28 年 10 月</p>	<p>平成 27 年度に続き 2 回目であるが、今回は身体障害者補助犬を中心に話を進めた。補助犬は人の福祉事業の一環であり、盲導犬、介助犬、聴導犬といわれるイヌたちが視覚障害、肢体不自由、聴覚障害を有する人を心身共に支え、その自立と社会参加を促進するというのを伝えた。その後、元介助犬の PR 犬を用いて、でも実施した。実際に犬が仕事をする様子は、大きなインパクトとなり、参加生徒の補助犬への理解を深めたと考えられる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 八王子いちょう塾公開講座 「アニマルセラピーって何だろう」 	<p>平成 25 年 6 月</p>	<p>アニマルセラピーという言葉が漠然と使われる中、ヒトと動物の絆の歴史、身近な動物と暮らすこと、動物たちが人に与える影響と効果、アニマルセラピーといわれるものが実はアニマルアシステッドアクティビティ・動物介在活動、アニマルアシステッドセラピー・動物介在療法、アニマルアシステッドエデュケーション・動物介在教育といわれる 3 種に分類されること等について講演を行った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 八王子いちょう塾公開講座 「ヒトを支えるイヌ—身体障害者補助犬—」 	<p>平成 26 年 10 月</p>	<p>イヌは古来様々な形で人のために仕事をし、数多くの使役犬がいる。身体障害者補助犬といわれるイヌたちは、身体が不自由な人を心身共に支え、その自立と社会参加を促すイヌである。盲導犬、介助犬、聴導犬が使用者のためにどのような働きをするのか、われわれは社会の中で補助犬と使用者をどのように受け入れていけばいいのかということについて講義を実施した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 八王子いちょう塾公開講座 「ペットロス—愛する動物との別れ—」 	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>ペットロスとは、愛する動物を失った飼い主の悲しみを表現する言葉である。ペットロスの定義から、ペットロスという状態になった時の心と体の変化（悲嘆反応）、背景要因、準備できることと実際に別れが訪れた時の対処法などについて講義を行った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 八王子いちょう塾公開講座 「ヒトを支えるイヌ—身体障害者補助犬—」 	<p>平成 29 年 6 月</p>	<p>平成 27 年度の講義に加え、今回は補助犬使用者が有する視覚障害、肢体不自由、聴覚障害についても説明し、障害理解、障害者理解を深めてもらうこととした。</p>

<p>・首都圏西部単位互換協会共同授業後期総合講義「21世紀の日本Ⅱ」「動物と共に生きる社会—コンパニオンアニマルがヒトのために果たす役割—」</p>	<p>平成 25 年 11 月</p>	<p>犬と猫の飼育頭数が 20 歳未満の人口を上回る時代となった日本において、コンパニオンアニマル（伴侶動物）といわれる小動物が家族の一員として家庭の中で生活し、社会の中で動物がなくてはならない存在になりつつある。「ヒトと動物の関係」（Human Animal Bond）という言葉が使われるようになって久しく、アニマルセラピー、アシスタンスドッグ（身体障害者補助犬）等動物を介在させたヒトの福祉が求められる時代でもある。その一方でヒトと動物の絆・愛着が強くなればなるほど動物との別れはつらいものとなり、ペットロスという心理的な問題も発生している。超高齢社会を迎えた今、身近な動物がわれわれにとってどのような意味を持つのか、ヒトの社会で生</p>
<p>・八王子市立秋葉台小学校 4 年生総合の授業における身体障害者補助犬についての授業</p>	<p>平成 26 年 10 月 24 日、31 日から現在に至る（毎年 2 回）</p>	<p>きる動物が果たす役割とは何であるのか、私たちは動物と共にどのように生きていくべきなのか等受講生と共に考えながら講義を実施した。</p> <p>4 年生の総合の時間には福祉について学ぶ時間が設けられている。この枠を使用し、盲導犬について、聴導犬についてそれぞれ 90 分の授業を実施している。盲導犬の授業では山川の講義では、視覚障害と盲導犬についての話をし、その後八王子在住の盲導犬使用者から直接体験談を語ってもらい、さらに盲導犬歩行のデモを実施してもらっている。聴導犬の回では、聴覚障害と聴導犬についての山川からの簡単な講義の後、非営利活動法人聴導犬育成の会（神奈川県鎌倉）の聴導犬デモを実施している。また、実際に聴導犬使用者から話を聞く機会を設けたこともあった。児童にとっては普段あまり出会うことのない盲導犬や聴導犬を直接目にし、障害者や補助犬に対する理解を深める貴重な授業となっている。</p>
<p>職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項</p>		
<p>事項</p>	<p>年 月 日</p>	<p>概 要</p>
<p>1 資格、免許 文学士 学士（社会福祉学） 社会福祉士 精神保健福祉士 認定心理士 修士（社会福祉学）</p>		<p>青山学院大学 東京福祉大学 目白大学大学院</p>
<p>2 特許等 なし</p>		
<p>3 実務の経験を有する者についての特記事項 ・甲斐歯科医院における受付相談業務</p>	<p>昭和 62 年 5 月～平成 20 年 3 月</p>	<p>個人歯科医院における受付全般の業務と歯科医療事務に加え、生活保護受給者対象の指定医院（杉並区）でもあったため、その手続き等の指導も行った。受給者は高齢者に加え、精神障害、知</p>

		<p>的障害等を持つ人も多く、歯科だけのことではなく、生活全般、病気、障害等あらゆることの相談に応じた。生活保護受給者・高齢者の患者ともに独居が多く、年齢・生活・病気等種々に関することを診療の前後に聴いていたが、これは患者にとって一種のカウンセリング効果をもっていたと考えられる。また、歯科訪問治療も行っていたため、訪問に同伴し、患者からだけでなく、家族からの質問・相談にも応じていた。高齢者を抱える家族の環境・心理には複雑なものがあり、向かい合って話を聴くこと自体が大きな意味を持っていた。問題がさらに複雑化・専門化するときは、担当の介護支援専門員（ケア・マネージャー）、あるいはかかりつけ医と連携をとりつつ、患者と家族双方の対応に当たっていた。超高齢化社会を迎え、医療と福祉それぞれの専門家の連携が重要視されるなか、地域医療の活性化の一躍を担う歯科医院のスタッフとしての仕事に携わった。</p>
<p>4 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイにおけるインドシナ難民のボランティア活動 ・日本動物病院福祉協会・CAPP（Companion Animal Partnership Program）活動 ・緊急災害時動物救援本部福島シェルターにおけるタスクフォース活動 ・福島における動物の支援活動 	<p>昭和 55 年 7 月～8 月</p> <p>平成 23 年 5 月～現在に至る</p> <p>平成 23 年 7 月～平成 24 年 1 月</p> <p>平成 24 年 1 月～現在に至る</p>	<p>最初の 2 週間は上智大学派遣チームの一員として、タイ・バンコクのトランジットセンター（第 3 国へ出発前の一時滞り場所）にて主に子供たちを対象に活動を行った。また同時に、バンコクのスラム街にある学校へ訪問活動を行う。日本から持ち込んだ手作りの紙芝居等を使い、日本文化の紹介を兼ねた活動を行う。その後 1 ヶ月間、NPO 法人「日本ボランティアセンター」の派遣により、カンボジア国境地帯、メコン川沿いにあるウボンのキャンプにて活動を行った。</p> <p>日本動物病院福祉協会（JAHA）が実施する CAPP 活動は全国的な規模で実施されている動物介在介入である。ヤマザキ学園大学南大沢キャンパスが立地する八王子では、高齢者施設等 4 施設において動物介在活動が実施されている。月に 1 回実施されるそれらの活動に参加するとともに、近隣多摩地区の小学校で実施される動物介在教育にも参加し、子どもたちへの動物への理解を深めるサポートを務めている。</p> <p>東日本大震災の影響として発生した福島原発事故により 20 キロ圏内から保護された犬と猫のシェルター「緊急災害時動物救援本部福島シェルター」（福島県三春町）において、タスクフォースとしてシェルターワークを断続的に実施した。シェルターではスタッフ 3 名、現地ボランティアと共に、保護された犬と猫の日常的なケアを中心とした活動に参加した。</p> <p>緊急災害時動物救援本部福島シェルターにおいて現地ボランティアとして活動していた女性たちで立ち上げた「アニマルライフサポート福島」では、避難した後に残された動物の給餌活動並びに過剰繁殖を防止するための不妊運動を実施して</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 有料介護施設カーロガーデン大塚における動物介在活動 	<p>平成 24 年 9 月～ 現在に至る</p>	<p>る。それらの活動に不定期・断続的に参加している。度新白河駅の近隣に開設された不妊手術専門クリニックにおけるボランティア活動が中心である。不妊手術への理解が低い地域においては、飼い主へその必要性を丁寧に説明し、理解を求め、手術へとつなげていくメンバーたちの仕事は地味ではあるが、確実に動物たちの命を救う手段となっている。</p> <p>介護施設に入所する高齢者を対象とした犬を介在させたふれ合い活動を実施するため、立ち上げ準備から関わった。他の教員 2 名と共に施設と連携を進め、施設評価、基本方針の決定、ボランティア教育、犬の適正評価等を実施し、活動開始に至った。現在は月 1 回のペースで活動を実施している。特徴ある施設内レクリエーションの 1 つとして認識され、活動に参加する入居者の QOL の向上につながるものと考えられる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都立南大沢学園祭での動物ふれあい活動 	<p>平成 25 年 12 月～ 現在に至る (年 1 回)</p>	<p>都立南大沢学園とは、地域連携の一環として相互の関係を保っている。毎年 12 月に実施される学園祭では本学の教員と学生、地域ボランティアが参加し、動物とのふれあい活動、動物のペーパークラフト作りなどを実施している。動物はボランティアのイヌやウサギ、本学飼育のヤギなどであり、毎年大変好評をえている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 八王子市立秋葉台小学校サマースクールでの授業実施 	<p>平成 26 年 7 月～ 現在に至る (年 1 回)</p>	<p>秋葉台小学校では 1 学期修了直後の 1 週間に、地域のボランティアを招いての講習会の器官を設けている。本学では学生とともに毎年参加し、本年で 4 回目となる。1 回目は環境教育をテーマに、ワークショップ形式での授業を提供し、2 回目以降は「ワンちゃんと友達になろう」というテーマで、地域のボランティアハンドラーさんの参加協力のもと、イヌとどのようにかかわっていけばいいのかを講義と実習を含めて提供している。毎年大変人気のある授業で、多くの参加生徒が定員を超えて参加している。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物愛護ふれあいフェスティバル ((財)日本動物愛護協会主催イベント) 	<p>年 1 回動物愛護週間期間内土・日開催</p>	<p>NPO 法人「日本動物衛生看護師協会」の一員として、日常生活における動物の健康管理について一般の参加者に説明・指導を行う。日頃動物と共に生活をしていても、日常の管理について十分な知識を持っていない飼い主が少なくない。ブラッシングや歯磨き等直接体に触れての健康管理、体重に応じた、特に肥満予防・対策を目的とした食事を与えるための栄養管理、また人間社会で動物が暮らしていくための基本的なしつけまで、ヒトと動物がより快適に共に生活していくために必要なことを、飼い主からの相談を含め、指導・助言していった。</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 アシスタンスドッグ演習テキスト	共著	平成21年2月	株式会社教育アシストセンター p1-p47 p50-p126	動物看護を学ぶ学生として、アシスタンスドッグ（身体障害者補助犬）について必要な知識を得られることを目的としたテキストである。 内容としてはまず、アシスタンスドッグの歴史、育成の現状、サービス内容（補助犬の仕事）を盲導犬、介助犬、聴導犬それぞれについて説明する。次に世界のアシスタンスドッグに関する法律、身体障害者補助犬法と補助犬法施行前の盲導犬に関する法律についてみていく。さらに、視覚障害者、肢体不自由者、聴覚障害者である補助犬使用者理解のために障害者福祉について述べている。また、現在補助犬と実際に暮らしている盲導犬・介助犬・聴導犬それぞれの使用者のインタビューから、その実情を紹介する。最後に一般市民と補助犬との関係、社会的受け入れ、そして動物看護師としての役割について考えていく。動物看護を学び、動物のプロを目指す学生が、補助犬についての正しい知識を得て、補助犬の普及・啓蒙活動の先人をきり、補助犬法の目的である、障害者の社会参加と自立に寄与できることを期待する。 共著者： <u>山川伊津子</u> 、 <u>福山貴昭</u>
2 動物看護学教育標準カリキュラム準拠教科書 人と動物の関係学 第5章ペットの飼育	共著	平成26年8月	株式会社インターズー	全国動物保健看護系大学協会により策定された動物看護学教育標準カリキュラムに準拠した教科書の1冊であり、担当章では 1. 人はなぜペットを飼うのかー人が動物をペットとして飼育する理由、2. ペット飼育の歴史と現状、3. ペットの飼育ー人と動物がともに幸せに暮らすために必要なこと、4. ペットへの愛着と依存、5. ペットロスの定義と対策について記載した。 総ページ p115 本人担当部分：p55-p68 共著者：、石田戢、加隈良枝、梶ヶ谷博、桜井富士朗、水越美奈、 <u>山川伊津子</u> 、 <u>横山章光</u>
3 知りたい！やってみよう！アニマルセラピー 第5章ペットロス、第7章アニマルセラピーの歴史と概論	共著	平成27年10月	駿河台出版	本学アニマルアシステッドセラピー論並びにアニマルアイシステッドセラピー演習・実習授業内で教科書として使用している。担当章のペットロスでは、その定義、悲嘆反応、準備と対処等についてトピックを入れながら記述した。またアニマルセラピーの歴史と概論では、ヒトと

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 動物看護学教育標準カリキュラム 準拠教科書 動物公衆衛生学	共著	平成27年12月	株式会社インターズー	<p>動物の関係、医療の側面からの動物との歴史、愛着、アニマルセラピーの効果何度について説明を行った。 総ページ p237 本人担当部分：87p-106p, p163-p175 共著者：川添敏弘、堀井隆行、<u>山川伊津子</u>、赤羽根和恵</p> <p>全国動物保健看護系大学協会により策定された動物看護学教育標準カリキュラムに準拠した教科書の1冊であり、担当章では、ヒトと動物の関係、動物愛護、動物介在介入と動物福祉について記載した。 総ページ p191 本人担当部分：p16-p26 共著者：白井優、内田明彦、加藤雅彦、小林淳、能田淳、本田三緒子、蒔田浩平、万年和明、村松康和、八木行雄、<u>山川伊津子</u>、山田文也、湯川尚一郎</p>
1 身体障害者補助犬の社会的受け入れについて (査読付き)	単著	平成21年3月	「ヤマザキ動物看護短期大学雑誌」 p171-p176	<p>身体障害者補助犬法は二つの大きな政策的柱を持つが、その一つが「身体障害者補助犬使用者の社会的アクセス権の保障」である。法律で保障されているにも関わらず、受け入れを拒否されるという自体がいまだに発生している。この理由の一つとして、事業者のみならず、一般市民の補助犬に対する理解不足と、補助犬法の認識の低さを挙げられるのではないかと推測する。一般の人々の補助犬に関する認知度および理解度を調べるためにアンケートによる質問紙調査を行った。その結果、補助犬の社会的受け入れの円滑化をはかるには、「補助犬に関する情報提供と一般市民向け普及・啓発運動」が必要であると考察できた。</p>
2 身体障害者が求める動物看護師の役割 (査読付き)	単著	平成22年3月	「ヤマザキ動物看護短期大学雑誌」第2号 p103-p109	<p>身体障害を有する補助犬使用者にとって、補助犬は「生きた自助具」であり、使用者の体の一部となってその生活をサポートする。そのような補助犬の健康を維持するためにも、動物病院での受診は欠かすことができない。障害を有する人が自分の補助犬とともに動物病院に来院した際に、動物看護師はどのような支援ができるのか。実働する補助犬の使用者への聞き取りを通して明らかにすることとした。動物看護師が補助犬使用者が受診しやすい動物病院の環境を提供するこ</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				とは、補助犬の健康管理に寄与し、結果として、身体障害者である補助犬使用の自立と社会参加を促すと考えられる。
3 障害者支援施設での乗馬療法（Ⅱ） —施設内での乗馬療法の試みと職員による効果の検証—	共著	平成22年3月	「白鷗大学教育学部論文集」第4巻1号、 p203-p221	山形県の知的障害者施設で実践されている乗馬療法についてのデータをとった。乗馬中の表情や姿勢、行動、目線の変化をのべ人数 277 人を対象に実施した。結果は補助に入った施設職員により評価された。その結果、すべての項目で効果的な検証結果を得ることができた。 共著者：川添敏弘・ <u>山川伊津子</u> ・高橋千秋・高橋宏行・村山啓・庄司泰夫・井上博・福山貴昭
4 身体障害者補助犬使用者と動物看護師—その機能と役割—	単著	平成23年3月	修士論文 目白大学大学院 生涯福祉研究科生涯福祉専攻	身体障害者補助犬は、身体障害者の自立と社会参加を促進するための「生きた自助具」といわれる。視覚障害者のための盲導犬、肢体不自由者のための介助犬、聴覚障害者のための聴導犬は、それぞれ障害特性の異なる使用者のために仕事をする。そのような補助犬にとって、動物病院の存在は欠かせないものがあり、病気でなくとも健康診断のために定期的に通院する使用者も多い。補助犬が動物病院で受診する際に、動物看護師が補助犬使用者に対してどのようなサポートができるのか、使用者はどのようなことを動物看護師に求めているのかを調査を通して明らかにすることとした。 A4版 全46ページ
5 重度・最重度知的障害者に対する乗馬を介在した身体的効果の検証 (査読付き)	共著	平成23年3月	「ヤマザキ学園大学・ヤマザキ動物看護短期大学雑誌」第1号 p57-p67	山形県の知的障害者施設で実践されている乗馬療法についてのデータをとった。本研究では、バランス力の向上に着目した事例研究を行った。その結果、重度の身体的ハンデを持った施設利用者の歩行や姿勢が、乗馬直後は明らかに改善することを証明した。 共著者：川添敏弘・ <u>山川伊津子</u> ・井上博・高橋千秋・庄司泰夫・村山啓・高橋宏行・福山貴昭

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 「緊急災害時動物救援本部福島シェルター活動報告」(査読付き)	共著	平成24年3月	「ヤマザキ学園大学・ヤマザキ動物看護短期大学雑誌」第2号 p67-p79	平成23年3月に発生した東日本大震災並びに福島第一原発の事故により、福島県では住民の避難が実施された。それに伴い多くの動物たちが残され命を失うこととなった。事故から4か月が経過した時点で、緊急災害時動物救援本部は福島県三春町に直轄のシェルターを作り、20キロ圏内から救出された犬と猫の一時保護を開始した。9月より動物救援本部のタスクフォースとして定期的にシェルターワークに参加し、動物たちのケアを中心とする活動を実施した。保護された動物たちへの世話をする中、ヒトと動物との関わり、動物飼育の地域性、緊急時の同行避難等について、改めて考えることとなった。 本人担当部分：全章すべて執筆 共著者： <u>山川伊津子</u> 、井上留美
7 スーザンPコーヘン氏の講演から見る獣医療ソーシャルワーク (Veterinary Social Work)―獣医療ソーシャルワーカー (Veterinary Social Worker)としての動物看護師の役割 (査読付き)	単著	平成25年3月	「ヤマザキ学園大学雑誌」第3号 p99-p107	平成16年にヤマザキ動物看護短期大学の開学記念講演として米国より招聘したスーザン・コーヘン氏の講演では、ソーシャルワーカーであり、動物病院に勤務する師が、動物看護師がソーシャルワーカーとして果たす役割の重要性を語った。獣医療ソーシャルワークには、①悲嘆とペットロス、②動物介在相互作用、③ヒトに対する暴力と動物虐待との関連性、④共感疲労のマネジメントという4分野があるといわれている。獣医療の現場で仕事をする動物看護師は、特に飼い主に対する対人援助者としての役割が大きいとコーヘン氏は述べている。今後この分野への教育も必要になるであろうと考えられる。
8 高齢者を対象とした犬を介在させた活動効果の検討―回想法の視点から― (査読付き)	共著	平成25年3月	「ヤマザキ学園大学雑誌」第3号 p19-p27	高齢者支援施設で行われている動物介在活動の効果を表情と言葉から分析し、回想法を切り口として事例研究を行った。その結果、他の刺激物質と比較して、犬の方がQOL向上の効果が高いことが分かった。本研究は第2回日本認知症予防学会での発表を詳しくまとめなおしたものである。 共著者：川添敏弘・ <u>山川伊津子</u> ・福山貴昭・堀井隆行・田中真悠・樽井初枝・横室純一

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 動物看護学生への学生支援に関する研究—学生相談の現状と課題	共著	平成26年3月	「ヤマザキ学園大学雑誌」第4号 p29-p43	共同研究として行ってきた「ヤマザキ学園大学学生に対する学生生活への適応支援に関する実践的研究」のまとめとして、以下の3項目について報告し、学生支援・学生相談のあり方を検討するための基礎的資料と課題を示した。Ⅰ学生支援・学生相談の現状と課題について一般的な傾向（小倉）、Ⅱ学生支援の大きな課題となっている発達障害を有する学生への支援（西村）、Ⅲ学生相談学会や日本学生支援機構が行う研修会の動向（山川）。 共著者：小倉啓子・西村信子・ <u>山川伊津子</u>
10 盲導犬使用の動機についての調査（査読付き）	共著	平成26年10月	日身体障害者補助犬学会誌8号（1） p30-p35	現役の盲導犬使用者9名に、盲導犬使用の動機について半構造化面接を実施し、使用を決めた理由についての分析を行った。その結果、動機として「接近理解（納得）型」、「目標達成型」、「混合型」の3つを考えることができた。このうち最も多かったのが「接近理解（納得）型」であり、身近なところで直に盲導犬使用者と接し、盲導犬への理解を深めていくことが使用を決める大きなきっかけとなっていることが理解できた。 共著者： <u>山川伊津子</u> ・須貝守男・田中真悠
11 身体障害者補助犬に対する使用者の意識調査—補助犬の心理的サポートについて—（査読付き）	共著	平成27年10月	日身体障害者補助犬学会誌9号（1） p40-p48	補助犬と暮らすことにより、使用者が自分の補助犬に対してどのような肯定的な気持ちを持つのかを11名の補助犬使用者に対して聞き取り調査を実施した。その結果、補助犬使用が補助犬と使用者との情緒的絆により、使用者を前向きな気持ちにさせるだけでなく、使用者の家族や一般市民にもポジティブな心理的効果を与えていることが示唆された。 共著者： <u>山川伊津子</u> ・川添敏弘・堀井隆行・田中真悠
(その他) 「記事」				
1 私のボランティア1ヶ月半	単著	昭和55年10月	「月刊 PHP」10月増刊号 p79-p84	NPO 法人日本ボランティアセンターの派遣による、インドシナ難民のためのタイでのボランティア記。はじめの2週間はタイ・バンコクのトランジットセンターで第3国への出発を待つ難民対象の活動を行う。同時にバンコク、スラム街の学校にて、日本文化の紹介を含めながら子供たちへ訪問活動をする。その後カ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「学会発表」				ンボジア国境地帯にあるウボン地区のキャンプにて、活動を行う。命を掛けて母国カンボジアを脱出し、新しい国での生活に夢をかける難民の姿は、豊かな国で何不自由ない生活をしていた日本の学生であった筆者に多くの示唆を与えた。
1 身体障害者補助犬の社会的受け入れについての調査	-	平成20年 10月	日本身体障害者補助犬学会 第3回大会 (於ヤマザキ動物看護短期大学)	身体障害者補助犬法が施行されて6年が経過したが、いまだに受け入れ拒否が社会で起こっている。一般市民が補助犬についてどれだけ認知しているのかをアンケート調査を通して明らかにし、社会的受け入れに関して何が必要かを考察した。結論としては、一般の人々が補助犬に接する機会を多く提供すること、すなわち啓蒙活動を活発化していくことが一番求められる。
2 身体障害者が求める動物看護師についての一考	-	平成22年 10月	日本身体障害者補助犬学会	補助犬使用者が補助犬と共に自立して社会参加を営める生活を続けていくには、補助犬の健康管理は欠かすことができない。定期的に動物病院へ通院する使用者が多い中、獣医療の現場で仕事をする動物看護師は身体障害を有する使用者にどのようなサポートが出来るのかを明らかにすることを目的として聞き取り調査を実施した。盲導犬使用者、介助犬使用者、聴導犬使用者それぞれの障害特性に応じて求められることは異なり、支援もそれに沿ったものであることが望ましいということが考察された。
3 業務分析からみる動物看護師の意識調査	-	平成24年7月	日本動物看護学会 第22回大会 (於ヤマザキ学園大学)	動物医療の現場で仕事をする動物看護師たちが実際にどのような仕事をしているのか、またそれぞれの業務に対してどのような意識をもって取り組んでいるのか調べることを目的として調査を実施した。動物病院内における動物看護師の業務を7グループ 56項目に分類し、それぞれの業務に対する実施度、重視度、自己評価を「よく行っている」～「行っていない」までの5段階評価で回答してもらい、その結果を分析、考察を行った。 山川伊津子、川添敏弘、赤羽根和江、井上留美、若尾義人、山崎薫

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 業務分析からみる動物看護師の意識調査Ⅱ	-	平成25年7月	日本動物看護学会 第22回大会 (於帝京科学大学)	<p>前回の調査では 60 に満たない数の回答を得られたが、さらにその数を増やすために再度調査を実施した。各項目について現役の動物看護師たちが、どの程度実施し、重要度と事崩壊についてどのように考えているかを把握することは、今後動物看護教育を実施するにあたり参考にすることが可能である。また、現役動物看護師の卒後教育、継続教育へも生かしていくことができると考える。</p> <p>川添敏弘、<u>山川伊津子</u>、赤羽根和江、若尾義人</p>
5 イギリス・アメリカの動物看護の歴史からみる日本の動物看護の現状—英米日における動物看護の歴史の三カ国比較—	-	平成25年7月	日本動物看護学会 第22回大会 (於帝京科学大学)	<p>イギリス、アメリカ、日本の動物看護師の歴史を調べそれぞれの国において動物看護がどのように発展してきたのかを明らかにした。また三国の動物看護の歴史を年表にしたうえで「動物看護創成期」、「動物看護統一発展期」、「動物看護専門化期」に区分し、比較した。に日本の動物看護が英・米に比べその専門化が遅れていることが明確に理解でき、今後の発展が望まれる。</p>
6 盲導犬使用者の動機についての調査	-	平成25年9月	日本身体障害者補助犬学会 第6回大会 (於日本大学松戸歯学部)	<p>平成 14 年に身体障害者補助犬法が施行されてから、社会的な補助犬への理解も徐々に広がり、盲導犬の頭数も増加してきた。しかしながら盲導犬使用を希望しない視覚障害者も多数存在することも事実である。現役の盲導犬使用者がどのようにして盲導犬の使用を決めるに至ったかを明らかにすることは、使用を希望しない人たちの問題を解決する糸口へとつながると考えられる。今回盲導犬使用者 10 名への聞き取り調査の結果、使用に至った理由は大きく 3 つに分類することが可能であると理解できた。盲導犬使用の希望を阻むものを取り除き、一人でも多くの視覚障害者が盲導犬と共に社会参加を果たし自立することを期待する。</p>
7 身体障害者補助犬に対する使用者の意識調査	-	平成26年10月	日本身体障害者補助犬学会 第7回大会 (於中部国際空港)	<p>補助犬が使用者にとって心理面でどのような働きをしているのかを調べるため、11 名の補助犬使用者に対して聞き取り調査と愛着の測定を実施した。その結果補助犬と暮らすことによりポジティブな気持ちが上昇し、安心感を含めて心理的に支えられていると認識し、外出の頻度や他者とのコミュニケーションが増加していることが分かった。また、愛着については、一般の飼い主の平均が 21.2 であったのに対して、補助犬使用</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				者は 28.6 であった。補助犬は使用者を心身ともにさせる存在であり、社会の中で受け入れていくには、そのような両者の関係を理解する必要がある。
8 Research on animal-assisted intervention procedures for a individuals with severe developmental disorders I (重度知的障害者支援施設における動物介入手続きに関する研究 I)	-	平成27年8月	The 49th Congress of the International Society for Applied Ethology (Hokkaido University)	For individuals with severe developmental disorders to live in care facilities, they must learn to obey rules. However, this is not easy for those whose ability to understand is limited. In order to prevent accidents, their actions are restricted, unfortunately resulting in some individuals refraining from voluntary action. Partnering these individuals with a dog during the activity allows them to instigate appropriate voluntary actions towards the dog. This may eventually lead them asking appropriate voluntary actions towards human beings, indicating the importance of focusing on the approach when partnering an individual with a dog. We focused our research on whether it was preferable to approach a dog from its front or from its back. In consequence of the research, the subject who have severe developmental disorders feel difficulty to accept unexpected actions of the dog, as well as the fact that the head is smaller than the back. It is observed that the interaction should be begin from the back and then from the front of the dog.
9 視覚障害者のニーズ調査—移動時におけるニーズとその支援、盲導犬使用者と白杖使用者の比較から—	-	平成27年10月	日本身体障害者補助犬学会第8回大会 (於羽田空港)	盲導犬使用者と白杖使用者の主として公共交通機関を用いての移動におけるニーズを調べ、その支援を検討することとした。 問題点として明らかになったのは、1・エスカレーターの片側歩行の危険性、2. 点字ブロックに関する問題、3. トイレの規格についての問題などが明らかとなった。視覚障害者が暮らしやすい環境はすべての人にとっての快適な環境であり、日常生活における市民一人一人の気づきが、ユニバーサルデザイン社会の実現になっていくと思われる。
10 動物看護教育の現状と臨床現場への活かし	-	平成28年2月	第12回日本獣医内科学アカデミー (於パシフィコ横浜)	看護職協会の理事としての講演であったが、まず動物看護の歴史をイギリス、アメリカ日本という順序で振り返り、日本の動物看護、動物看護教育の5つの特徴を確認した。一つ目は広範囲、多岐にわたる業務内容、二つ目は職域の不透明さ、動物看護師独自の業務実施度の低さ、ナース業務とテックにシャン業務の両立、卒後教育の必要性となる。教育によって培われた技術と知識が臨床の現場

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 業務調査から見る動物看護師の意識—質問紙調査結果に対する動物看護師への聞き取り調査	-	平成28年6月	日本動物看護学会第25回大会（於 酪農学園大学）	<p>を支え、さらに現場で発生する問題を教育の場に挙げて考察していく、という教育と臨床それぞれが両輪となって動物看護を支えていく体制が今後は重要になると思われる。</p> <p>日本動物看護学会第21大会および第22回大会において「業務調査から見る動物看護師の意識」に関する2回の報告をおこなった。本調査では、質問紙調査結果について、現職動物看護師5名に意見を求め聞き取りを実施した。「受付業務」については、動物看護師としての本領が発揮できる『トリアージュ』の低さの問題と、『電話対応』の難しさなどが述べられた。「診察室および処置室での業務」については、獣医師法17条を根拠とする動物看護師の立ち位置と現場業務との乖離などが指摘された。「入院室での業務」については、『看護計画』とその実施および記録の難しさなどが述べられた。「検査室での業務」については、検査技師としての動物看護師の業務の重要性が述べられた。「手術関連業務」については、周術期業務の重要性と病院の規模（獣医師の人数）による業務内容の差などが述べられた。「飼い主対応」については、対人援助の難しさが指摘された。「病院の経営や関連サービス及びスタッフ教育に関する業務」では、個々の病院の差が大きかったが、動物看護師だからこそできるグルーミングや自己研鑽としての勉強会の重要性などが指摘された。</p>
12 イヌ・ネコがもたらす“癒し”の概念調査	-	平成28年6月	日本動物看護学会第25回大会（於 酪農学園大学）	<p>動物を専門に学んでいる大学生が、イヌとネコのどこにどのように“癒し”を感じているのかアンケート調査を実施した。結果からは、イヌとネコがヒトに与える“癒し”には4つの因子があること、さらにそれらが複合的に絡み合い“癒し”の概念作り上げていることが理解できた。</p>
13 保育園におけるヤギ飼育活動の課題と改善—神奈川県A保育園への介入事例を通して—	-	平成29年7月	日本動物看護学会第26回大会（於ヤマザキ学園大学）	<p>2016年6～11月に、神奈川県にあるヤギ飼育を実施している保育園において、適性飼養の指導並びにヤギの削蹄、グルーミングを実施した。さらに勉強会を実施し、保育者へはインタビュー調査を行った。園児に良い影響を与える飼育方法を知らずに飼育を実施する園もある中、教育領域での動物飼育指導や介入</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 中途視覚障害者の障害の受容における盲導犬の働き		平成29年10月	日本身体障害者補助犬学会大 10 回学術大会（於アオーレ長岡）	<p>は、専門知識を持つ動物看護師の役割のひとつになると考えられた。</p> <p>盲導犬は身体障害者補助犬の一種で、視覚障害者の歩行を安全に誘導するが、同時に心理的支援も大きいと言われている。本研究では、中途視覚障害者である盲導犬使用者に半構造化面接を実施し、受障による心理的なダメージを、盲導犬と暮らすことでどのように乗り越えて行ったかを検討した。盲導犬と歩くことにより、行動範囲が広がり、他者とのかわりが増加していた。それら自立生活や社会参加へとつながり、更には生きる意欲や障害の受容の一部となってイリ宇野ではないかということが示唆された。</p>
「研究会」 1 被災地の動物救援～どうぶつ救援本部福島シェルター～	-	平成23年12月	比較心身症研究会第 41 回大会 （於日本獣医生命科学大学）	<p>「どうぶつ救援本部」福島シェルターでのボランティア活動を中心として報告を行った。このシェルターは東日本大震災後の原発事故で 20 キロ圏内に残された犬と猫の保護施設として 7 か月にわたり郡山郊外三春町に開設された。月に 2 回程度の割合で現地に通り、シェルターワークを実施する中、緊急時の動物たちの同行避難、動物愛護・適性飼養に対する地域の格差、原発問題等について考えを新たにした。</p>
2 地域連会活動としての動物介在活動—大学と介護施設との協働の試み—	-	平成25年12月	比較心身症研究会第 47 回大会 （於日本獣医生命科学大学）	<p>地域連携活動の一環として、ヤマザキ学園大学では介護施設における動物介在活動を立ち上げ、実施している。大学にとっては教育・研究のフィールドとして意味を持ち、施設にとっては特色あるレクリエーションとして、入所者の QOL 向上へとつながる活動となっている。また参加するボランティアにとっては、愛犬と共に社会貢献することが大きな喜びである。今後は、ボランティアの増加、ボランティア・リーダーや学生ボランティアの育成等いくつかの課題があるが、活動拠点の拡大やさらなる地域サービス充実など今後の展開が期待される。</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「シンポジウム」 1 第3回ヤマザキ動物愛護シンポジウム：パネルディスカッション	-	平成20年 10月12日・13日	第3回ヤマザキ動物愛護シンポジウム (於：ヤマザキ動物専門学校、ヤマザキ動物看護短期大学)	<p>12日：パネルディスカッション「人と動物が共に生きるためのルール」のパネラーとして、「人より短い命の動物との別れの心の準備」について発言した。家族のように共に暮らすペットはほとんどの場合ヒトよりも早く亡くなってしまふ。一緒にいるときから、まずそのことをきちんと認識することが、重篤なペットロスにならないために必要である。その上で、日ごろから充実した時を共に過ごし、後悔のないようにすることが大切である。</p> <p>アニマルアシステッドセラピー（動物が介在する社会福祉）体験の指導を行う。車椅子上のクライアントとボランティア・ハンドラーという設定の下、犬との触れ合い、ボールやコマを使ってリハビリテーションの擬似体験をしてもらった。</p> <p>共同発表者：中川志郎、山崎薫、鈴木友子、福山貴昭、井上留美、<u>山川伊津子</u>、本田三緒子</p> <p>13日：パネルディスカッション「補助犬の活躍のために私たちは何ができるだろう」のパネラーとして補助犬の福祉について発言した。補助犬の仕事は犬にとって辛いと思われがちだが、盲導犬は一日中仕事をしているわけではなく、ハーネスを外すと家の中では普通のペットとなんら変わるところがない。介助犬・聴導犬については、仕事を遊びの延長として楽しんでいる。また、犬はもともと群れの中でリーダーに従う生き物で、ユーザーというリーダーのための仕事をしてほめてもらうのは犬にとって喜びである。補助犬はプライドと誇りを持って仕事をしている。</p> <p>共同発表者：山崎薫、新島典子、鈴木友子、福山貴昭、青木道代、<u>山川伊津子</u>、本田三緒子</p>
2 優良家庭犬普及協会シンポジウム「新しい飼い主とのコミュニケーション」	-	平成20年 10月19日	優良家庭犬普及協会シンポジウム(於：ヤマザキ動物専門学校)	<p>「新しい飼い主とのコミュニケーション」というタイトルで、譲渡された犬との最初の1週間の過ごし方と、新たな名前をつけることの大切さについて講演した。犬は最初の一週間で新しい環境に順応していくので、その間は家庭の日常生活を維持していくこと、また、新しい名前で新たな生活を始め、ヒトと犬との絆を構築していくことの重要性について講演した。</p>

